

宮道遺跡・宮道東遺跡発掘調査報告書

2 0 0 4

静岡市教育委員会

宮道遺跡・宮道東遺跡発掘調査報告書

2 0 0 4

静岡市教育委員会

序 文

静岡市清水三保は名勝三保の松原がある風光明媚で温暖な自然条件にめぐまれたところです。三保半島は日本の代表的な砂嘴で、最近では安倍川・藻科川の運び出す砂利を主体として、これに有度丘陵の崩壊物がわずかに加わって形成されたとされています。三保半島にある白浜Ⅰ遺跡では古墳時代の土器片のほか獣形土製品、土錘などが出土し、また縁生坊古墳^{えんじょうぼうこふん}では石棺のほか土器片などが出土しました。これらのことから三保半島では古くから人々の生活が営まれてきたことがわかります。

宮道遺跡・宮道東遺跡は、昭和46年の発掘調査で丸柄^{まるがら}が出土し、三保半島の遺跡の中でも奈良時代から平安時代にかけての有力な遺跡と考えられてきました。今回は平成11年度の宮道遺跡の調査と平成13年度の宮道東遺跡の調査の結果を掲載しました。この調査で宮道遺跡では鉄滓がみられ、周辺で製鉄が行われていたことが考えられます。宮道東遺跡の住居跡からは刀子や和同開珎^{わどうかいじん}が出土しました。平城京出土の木簡にも三保から「堅魚」を税として送ったことが記載されており、このことと考えあわせると当時の生活を知ることができる重要な遺跡です。

このような調査結果を掲載した本書が、多くの皆様のご供覧を賜り、学術研究のみならず学校教育、生涯教育など幅広い分野で活用されることを希望いたします。

最後になりましたが、調査にご協力、ご指導いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

静岡市教育委員会
教育長 織田 元 泰

例 言

1. 本報告書は静岡市教育委員会が埋蔵文化財保存事業として行った宮道遺跡・宮道東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は杉山 満の指導で大川敬夫が行った。
3. 調査の整理作業については、大川が大村明子、大塚由美子、片瀬志穂、西谷今日子の協力を得て行った。
4. 本書の執筆は大川敬夫が行った。
5. 発掘調査にあたっては土地所有者である柴早栄子氏、石野庄一氏をはじめ関係各位の文化財保護に対する理解とご協力に謝意を表したい。
6. 宮道遺跡・宮道東遺跡の発掘調査の資料はすべて静岡市教育委員会が保管している。
7. 本書に関する事務はすべて静岡市教育委員会が行った。

目 次

序文	
例言	
目次	

1. 調査に至る経緯	1
2. 環 境	1
3. 調査の概要	2
4. 遺 構	4
5. 遺 物	7
6. ま と め	14

挿図目次

第1図	宮道遺跡・宮道東遺跡位置図	1
第2図	宮道東遺跡トレンチ土層図	2
第3図	宮道遺跡・宮道東遺跡調査区配置図	3
第4図	宮道遺跡平面図・土層図	5
第5図	宮道東遺跡平面図・土層図	6
第6図	宮道遺跡出土遺物実測図(1)	9
第7図	宮道遺跡出土遺物実測図(2)	10
第8図	宮道遺跡出土遺物実測図(3)	11
第9図	宮道遺跡出土遺物実測図(4)	12
第10図	宮道東遺跡出土遺物実測図	13
第11図	宮道東遺跡1号住居跡出土刀子、和同開珎図	13

図版目次

- | | | |
|------|-------|----------------|
| 図版第1 | 宮道遺跡 | 1. 宮道遺跡調査前 |
| | | 2. 宮道遺跡調査区北から |
| | | 3. 宮道東遺跡調査区西から |
| 図版第2 | 宮道東遺跡 | 1. 宮道東遺跡調査区南から |
| | | 2. 宮道遺跡出土土器 |
| | | 3. 宮道遺跡出土土器 |
| | | 4. 和同開珎 |

宮道遺跡・宮道東遺跡発掘調査報告書

1. 調査に至る経緯

宮道遺跡は昭和40年代の前半に大塚源夫先生の指導で東海大学工業高校郷土研究部の踏査で発見された遺跡である。昭和46年には杉山満先生により発掘調査が行われ、奈良時代から平安時代にかけての住居跡や溝跡が確認された。また石製丸網や釣針が出土し、三保半島における有力な集落跡であることが判明した。昭和55年と昭和59年には三保第一小学校校舎改築と給食室建設のための調査が行われた。平成11年7月には静岡市清水三保字宮道1853番地でアパートの建設が行われることになり確認調査を実施した。今回はこのアパートの道路部分に上下水道を入れることになり平成11年11月から発掘調査を実施した。また静岡市清水三保宮道1846-1ほかの宮道東遺跡でも宅地造成が行われることになり平成13年3月から発掘調査を実施した。本書はこの2回に渡る調査の結果である。

2. 環 境

宮道遺跡は静岡市清水三保字宮道に所在する。三保半島の形成は、昭和2年に旧大里村から投入された赤煉瓦が1ヶ月後に直径数十センチの円礫となり三保半島に漂着し、有度丘陵と安倍川のもたらす材料によるものとされた。最近では安倍川が運び出した蛇紋岩を調査した結果から安倍川・粟科川の運び出す砂利を主体として、これに有度丘陵の崩壊物がわずかに加わったとされている。このように形成された三保半島であるが現在では日本の代表的な砂嘴としてあげられている。この半島には13ヶ所の遺跡が確認されており、そのうち宮道遺跡は昭和46年度の調査により集落跡であることが判明している。



国土地理院発行の25000分の1地形図を使用した

第1図 宮道遺跡・宮道東遺跡位置図

3. 調査の概要

(1) 調査区の設定

宮道遺跡での調査区は既存の道路からアパートに入るための道路に全長60m、幅1mのトレンチを設定し、さらにアパートの浄化槽部分に調査区を設けて調査を実施した。その結果、トレンチ北側部分で6棟の住居跡が検出されたためこの部分の調査区を拡張して調査を実施した。

宮道東遺跡では平成13年3月に2箇所のグリッドを設定して調査を実施した。その結果、グリッドNo.2で住居跡が発見された。このため平成13年4月から住居跡の発見されたグリッド部分の拡張と宅地造成により道路となる部分にトレンチを設定して調査を行った。その結果、調査面積は295.89m²となった。

(2) 調査の経過

宮道遺跡の調査は平成11年10月12日から平成11年10月27日までの12日間実施した。

平成11年10月12日 器材の搬入を行い調査区を設定し、調査を開始する。

10月13日 調査区北側で住居跡の焼土が確認できたためこの周辺を拡張して調査を行う。

10月22日 検出した住居跡の清掃を行い、写真撮影を実施する。

10月25日 住居跡の平面図・土層図の作成を行う。

10月27日 調査区の埋め戻しを行い、発掘調査を終了する。

宮道東遺跡の調査は平成13年3月12日に確認調査を行い、平成13年4月16日から平成13年4月27日までの8日間調査を実施した。

平成13年3月12日 確認調査を実施し、グリッドNo.2から住居跡を検出する。

4月16日 グリッドNo.2部分に調査区を設定し、宅地造成の道路部分にトレンチを設定して調査を開始する。

4月20日 住居跡の検出作業で床面から和同開珎が出土する。

4月24日 写真撮影を行い、平面図・土層図の作成に入る。

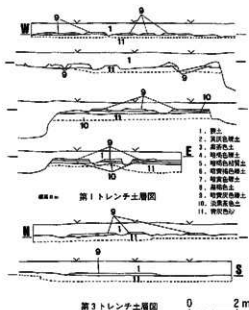
4月27日 埋め戻しを行い、今回の調査を終了する。

(3) 層位の観察

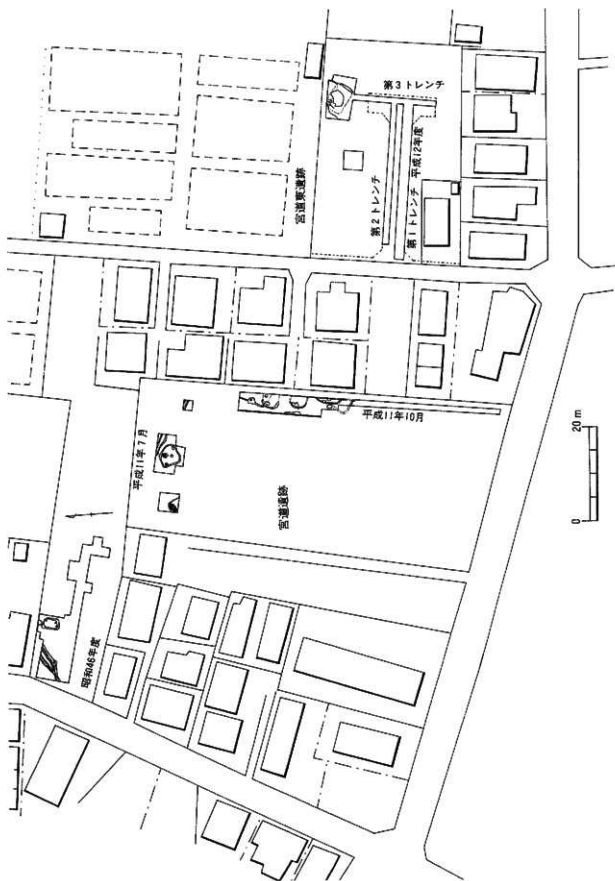
宮道遺跡の基本的な土層は4層である。第1層(1)は表土層で、厚さ60cm前後を測る畑の耕作土である。第2層(3)は黄色土で、厚さ18cm前後を測る。第3層(7)は黒色砂礫で、厚さ20cm前後を測る。第4層(23)は青灰色砂礫で遺跡のベースとなるものである。遺構は第1層(1)から第3層(7)までの上層にみられ、第4層(23)を切り込んでいる。

宮道東遺跡の基本的な土層は3層である。第1層(1)は表土層で、厚さ93cm前後の旧民家の庭土である。第2層(9)は暗黄褐色礫土で、厚さ20cm前後である。第3層(11)は青灰色砂層で遺跡のベースとなるものである。遺構は第2層(9)と第3層(11)とを切り込んでいる。

宮道遺跡・宮道東遺跡の遺構のベースとなるものは暗黄褐色礫土層、青灰色砂層、青灰色砂礫層である。



第2図 宮道東遺跡トレンチ土層図



第3図 宮道遺跡・宮道東遺跡調査区配置図

4. 遺 構

(1) 宮道遺跡の遺構

主な遺構としては奈良時代から平安時代の住居跡 6 棟が確認できた。

1号住居跡

調査区北東隅にあり、西側壁付近しか検出できなかったが、南北の長さ5.9m前後、現存の深さ44cm前後を測る。形状は隅丸方形の竪穴住居跡である。住居跡の南側の上面は2号住居により破壊されている。床面はほぼ水平で、南壁よりの床面に直径60cm前後のピットがみられるが、この住居跡の柱穴かどうかは不明である。西壁の中央にはカマドがある。カマドの大きさは東西1.8m、南北1.6m前後を測り、焚口部や煙道部は不明である。中央には壘形土器の口縁部破片がみられる。住居跡内からは土師器・須恵器が出土した。

2号住居跡

調査区北側から4.5m付近にあり、半分が調査区の東壁に入ってしまう。南北の長さ3.5m前後、現存の深さ34cm前後を測る。形状は1号住居跡より丸いが、隅丸方形と考えられる。床面はほぼ水平であるが、柱穴は認められない。床面の直下の中央の東壁で焼土と灰を含む暗褐色土がみられ、カマドの一部の可能性も考えられる。西壁よりの床面には鉄滓の入ったピットが掘り込まれている。住居跡内からは土師器片が出土した。

3号住居跡

調査区の中央部にあり、半分が調査区の東壁に入ってしまう。南北の長さ3.5m前後、現存の深さ38cm前後を測る。形状は2号住居跡に類似しており、隅丸方形と考えられる。床面はほぼ水平であるが、柱穴は認められない。西壁にはカマド跡がある。カマドの大きさは南北1.4m、東西1.24m前後を測り、東側に焚口部がみられる。住居跡内からは土師器片が出土した。

4号住居跡

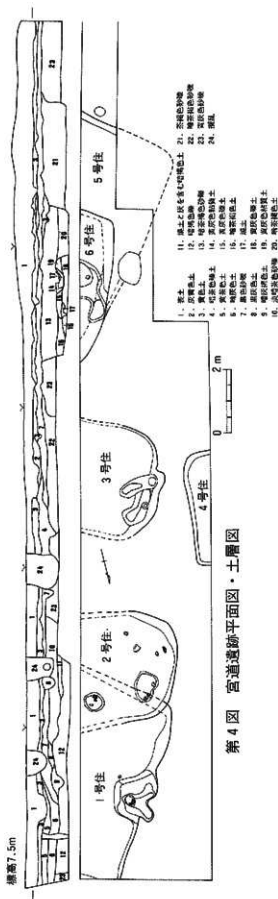
3号住居跡の西側で調査区の西壁付近にある。長さは東西3.5m前後、現状での深さ40cm前後を測る。出土物やカマドなどは認められないが、黒色砂礫（7）の下層で青灰色砂礫（23）を掘り込んでいること、形状が隅丸方形であること、床面が平らであることから4号住居跡とした。

5号住居跡

拡張した調査区の西側にあり、住居跡の北壁が6号住居跡により破壊されているため平面規模は不明であるが、現状での深さ80cm前後を測る。形状は隅丸方形と思われ、床面はほぼ平らである。西壁側で焼土の固まりが検出されており、これがカマドと思われるが形状とはどめていない。住居跡内からは土師器片・須恵器片が出土した。

6号住居跡

5号住居跡の北壁を破壊する形で確認された。現況で南北4.4m、深さ80cm前後を測る。形状は南西壁しか確認できないが隅丸方形と思われ、床面はほぼ平らである。西壁側で青灰色粘質土と焼土の固まりがみられ、これがカマドと思われるが形状をとどめていない。住居跡内からは土師器片・須恵器片・灰釉陶器片が出土した。



(2) 宮道東遺跡の遺構

主な遺構としては奈良時代から平安時代にかけての住居跡3棟が確認できた。

1号住居跡

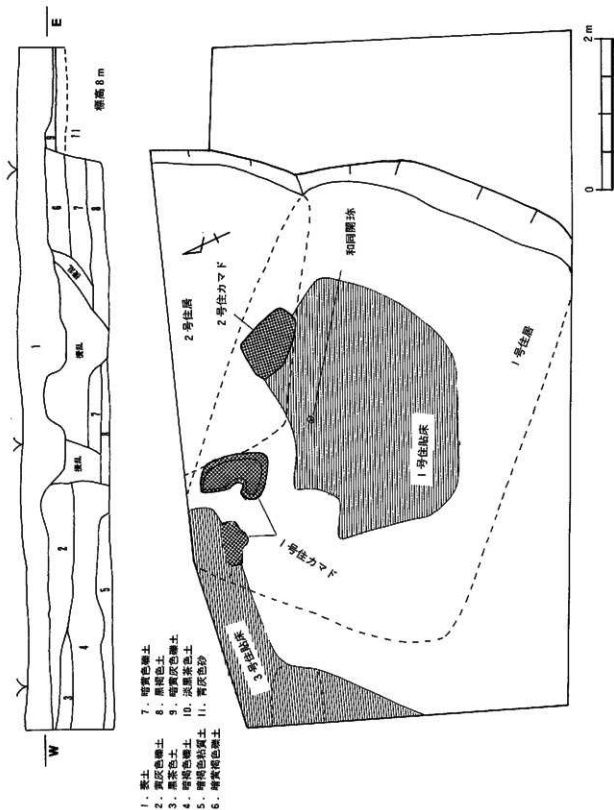
調査区中央にあり、北壁は2号住居跡、西壁は3号住居跡、南壁は攪乱により破壊されており、かろうじて東壁と北側のカマドの一部と床面が残っている。東壁の形状とカマドの位置から大きさは東西6m、南北4m、現況での深さ70cm前後と考えられる。形状は隅丸方形で、北西隅にカマドがみられる。カマドは南西に焚口部がみられることから1号住居跡のものと判断した。床面は中央部に粘土の貼り床がみられる。柱穴等は確認できなかった。住居内の貼り床上から和同開珎が出土した。その他、住居跡内から土師器片・須恵器片・刀子が出土した。

2号住居跡

調査区北壁にあり、大きさは現況で東西4m、深さ74cm前後である。南壁は大きく攪乱を受けており、西壁は3号住居跡により破壊されている。したがって東壁とカマドのみしか確認できないため、形状は不明である。調査区中央のカマド跡とした焼土は1号住居跡の貼り床から離れていること、1号住居跡のカマドとした場合には2号住居建設にあたり破壊されている可能性があることから2号住居跡のカマドとした。カマドは破壊されており形状は不明である。住居跡内からは土師器片・須恵器片が出土した。

3号住居跡

調査区北西隅にあり、1号住居跡のカマドの一部を破壊し、2号住居跡の覆土である黒褐色土(8)を切り込んでいる。形状は不明であるが、最下層には貼り床の一部である暗褐色粘質土が残っている。住居跡内からは土師器片・須恵器片・鉄滓が出土した。



5. 遺 物

(1) 宮道遺跡の出土遺物

1号住居跡の出土遺物（第6図1～9）

宮道遺跡の出土遺物は第6図から第9図に示した。このうち第6図は住居跡内出土の遺物である。第1図1から第1図9は1号住居跡から出土したものである。このうち1から6は土師器で、7から9は須恵器である。1・2・4は甕形土器で、1は推定口径22.6cmを測る遠江系の水平口縁の長胴甕の口縁部で、外面肩部にナメのハケ目がみられ、内面の頸部には粘土の縞目がある。2・4は駿東型の甕の口縁部で、2は推定口径30cm前後を測る。4は推定口径26cm前後を測り、外面肩部にはナメのハケ目が施され、内面にはヨコのハケ目がみられる。3は鍋形土器で推定口径44cm前後を測り、外面にはタテの荒いハケ目が施され、内面には粘土の縞目がみられる。5は鍋形土器の底部片で、推定底径7.5cmを測り、内面にヨコのハケ目がみられる。6は土師器の坏身で口径11.3cm、底径6cm、器高4.5cm前後を測り、外面に粘土の縞目がみられる。7は坏蓋で比較的低く、端部が尖り気味となる。8は坏身で推定口径13.2cm、底径9cm、器高3.8cmを測る。9は長頸甕の底部片と思われる。

2号住居跡の出土遺物（第6図10～12）

10～12は2号住居跡出土の土師器の遠江系の水平口縁の長胴の甕形土器の口縁部である。

3号住居跡の出土遺物（第6図13・14）

13・14は3号住居跡出土の土師器片で、13は遠江系の水平口縁の長胴の甕形土器の口縁部である。14は坏身の口縁部で、推定口径13cm前後を測る。

5号住居跡の出土遺物（第6図15～17）

15～17は5号住居跡出土の土師器片・須恵器片である。15は土師器の鍋形土器の底部で外面にタテのハケ目、内面にヨコのハケ目が見られる。16は須恵器の坏身の口縁部で推定口径13.8cm前後を測り、17は須恵器の坏身の底部である。

6号住居跡の出土遺物（第6図18～25）

18～25は6号住居跡出土の土師器片・須恵器片・灰釉陶器片である。18～20は土師器の遠江系の水平口縁の長胴の甕形土器の口縁部で、21は駿東型の甕形土器である。22・23は土師器の坏身で22は器高が高い。24は須恵器の坏身で口縁部が緩やかに立ち上がる。25は灰釉陶器の口縁部で先端がわずかに外に引き出される。

グリッド出土遺物（第7図26～31）

26～31はグリッド出土土器である。26は須恵器の台付皿で推定口径17cm前後を測る。27は須恵器の坏身で推定口径15cm、器高4.1cm前後を測る。28は須恵器の坏身で口縁部が真っ直ぐ上方に立ち上がる。31は須恵器の坏身底部である。32は灰釉陶器の底部で高台が小さな三角形となる。

表採土器（第7図32～第9図146）

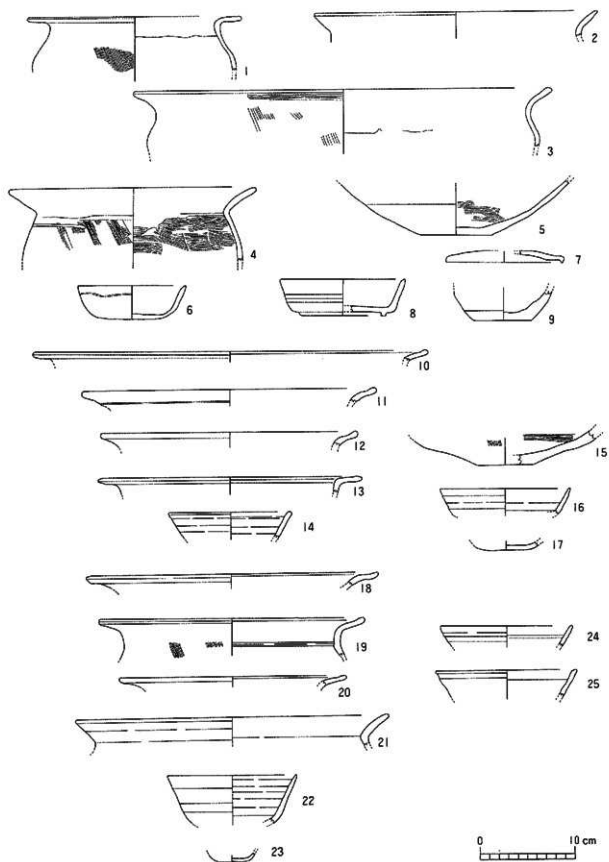
第7図32～第9図146は表採の遺物である。第7図32～51は土師器の甕形土器の口縁部で遠江系の水平口縁の長胴甕片と思われる。32は外面にタテのハケ目がみられ、内面には口縁部までヨコのハケ目がみられる。33は外面にナメのハケ目がみられ、内面の頸部付近には粘土の縞目がみられる。34は外面にナメのハケ目がみられ、内面頸部付近には粘土の縞目がみられ、口縁部は頸部に比べて厚くなる。35は外面に細かなタテのハケ目が口縁部付近にまで施され、内面の頸部付近には粘土の縞目がみられる。36は外面にタテのハケ目が施され、内面頸部付近には粘土の縞目がみられる。37は口縁部の外反が比較的緩やかで内面にヨコのハケ目が施される。38は外面にタテのハケ目が施され、内面にはヨコの

ハケ目がみられ、内面の頸部付近には粘土の縞目がある。39は外面にナナメのハケ目が施され、内外面の頸部付近には粘土の縞目がみられる。40は外面にタテのハケ目が施され、内面頸部付近には粘土の縞目がみられ、口縁端部が厚くなる。41は口縁部が緩やかに立ち上がり、外面にタテのハケ目が施される。42は外面にナナメのハケ目が施され、内面頸部付近に粘土の縞目がみられる。43は外面にナナメのハケ目が施され、内面頸部付近に粘土の縞目がみられ、口縁端部は上方に丸く収められる。44は外面にナナメのハケ目が施され、内面口縁部にヨコのハケ目がみられる。45・47は頸部から口縁部にかけてが厚くなる。46は外面にナナメのハケ目が施され、内面頸部付近に粘土の縞目がみられる。48・49は外面にナナメのハケ目が施され、頸部から口縁部にかけてが厚くなる。50は外面にナナメのハケ目が施され、内面頸部付近に粘土の縞目がみられる。51は外面にタテのハケ目が施され、内面頸部付近に粘土の縞目がみられる。52～57は土師器の甕形土器の底部破片である。52は内面にヨコのハケ目がみられ、鍋形土器の可能性が考えられる。53・54は底部から胴部に角度を持って立ちあがるものである。53には外面に荒いタテのハケ目が施され、54は外面にナナメのハケ目がみられ、内面にはヨコのハケ目がある。55～57は底部から胴部に比較的緩やかに立ちあがるもので、55は外面にタテのハケ目がみられる。56・57は外面にタテ・ナナメのハケ目がみられ、57は内面にヨコのハケ目が施される。

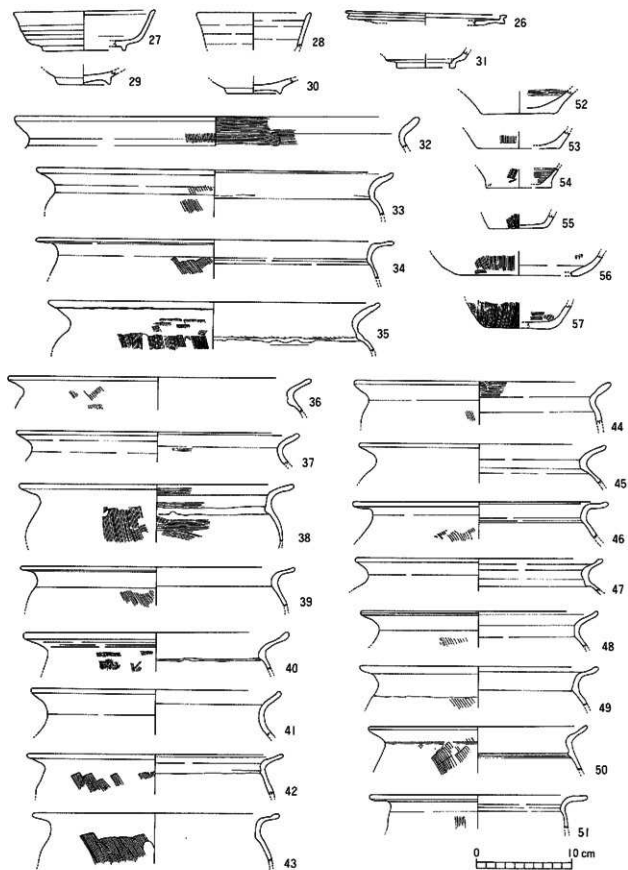
第8図58～68は土師器の甕形土器の口縁部の破片で、58～63は駿東型のものである。58にはナナメのハケ目がみられ、内面の肩部にはヨコのハケ目が施される。59は内外面の口縁部にヨコのハケ目が施され、60は内外面の肩部にヨコのハケ目がみられる。63は駿東型球胴甕系のもので、外面にはナナメのハケ目、内面には細かなヨコのハケ目がみられる。64は口縁部の屈曲が弱く、外面の口縁部にタテのハケ目がみられ、内面にはヨコのハケ目が施されている。65は胴部に対して口縁部が開いている。66は外面にタテ・ナナメのハケ目が施され、口縁部内面にはヨコのハケ目、胴部には荒いヨコのハケ目がみられる。67・68は小型甕で外面にタテのハケ目が施されている。第8図69～76は土師器の坏身である。69は口縁部の周囲が黒く、底部にヘラ削りの痕がみられる。71は内面が黒い。72は内面に放射状の暗文がみられる。74・75は底部から緩やかに立ち上がるもので、75・76は内面に放射状の暗文がみられる。77～81は土師器の鍋形土器の口縁部である。

第9図82～116までは須恵器片である。82～95は須恵器の坏蓋片で82・83は器高が比較的高く、端部が外に引き出される。84・85は端部が下に引き出される。86・91は擬宝珠状のツマミがあるものである。87～92は器高が比較的低いもので端部が下に引き出されている。93・95は端部が下に引き出され、94は端部が外に引き出される。96・97は大甕の口縁部である。

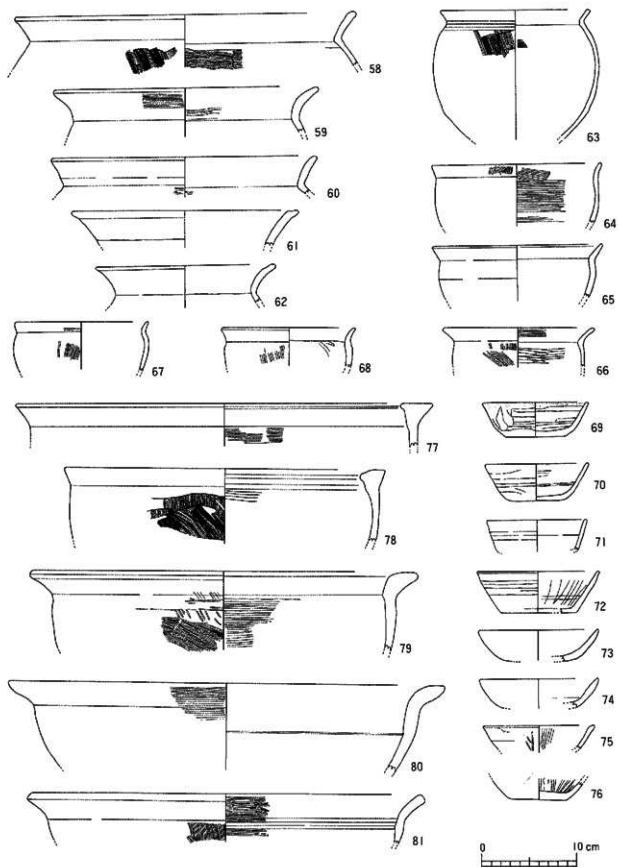
第9図98～114は須恵器の坏身片である。98・99・101は口縁部は外に向かって広がり、98・99・102・103・104は底部が高台と同じ高さとなる。100・101は無高台のもので、101は口縁部が外に広がる。105～109は有高台のもので、109は口縁部が外に広がる。110・111は無高台のもので底部から口縁部へ緩やかに立ち上がる。112は無高台のもので底部と胴部の間が明瞭で、口縁部は斜めに立ち上がる。113・114は口縁部片で、114は緩やかに立ち上がる。第9図115は高坏の脚部で、116は三足盤の足と思われる。第9図117～139は灰釉陶器片である。117は灰釉陶器の皿で高台断面が正方形に近くK-14に類似する。118～119は灰釉陶器片の口縁部で118は口縁端部がやや外に引き出され、119は上方に引き出される。120は口縁端部が大きく外に引き出される。121～139は灰釉陶器片の底部である。121・122は三日月高台で、123は高台が外に向かって付けられている。124は三日月高台の細くなったものと思われる。125～129は三角高台である。130～137は高台部分が高くなったものである。138・139は高台断面が丸みを帯びたものである。140は灰釉陶器の瓶の底部と思われ、141は三足盤の足と思われる。142は陶器の小皿で、143は土師器の土鍾である。144は2号住居跡のピット出土のフイゴの口である。145・146は鉄片である。147は砥石である。



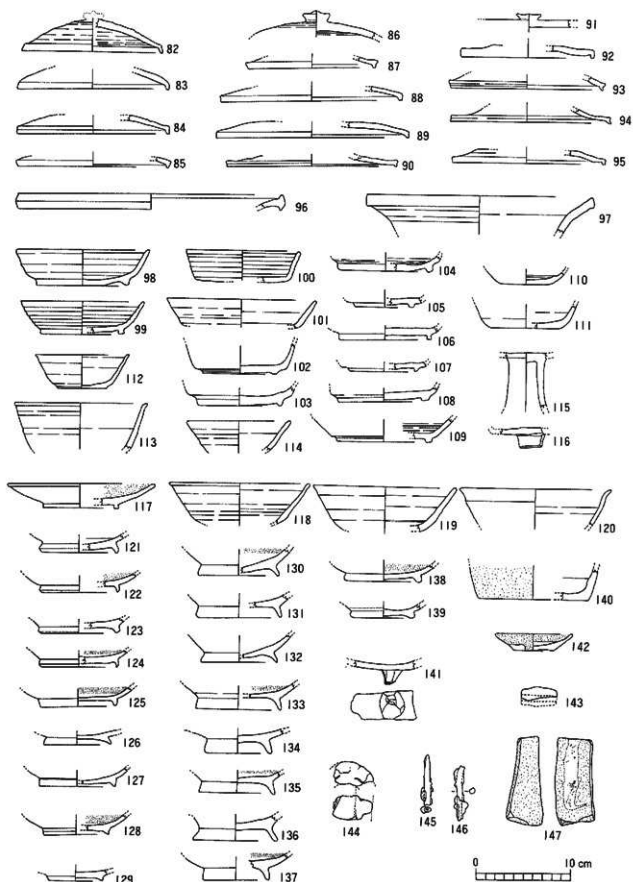
第6図 宮道遺跡出土遺物実測図(1)



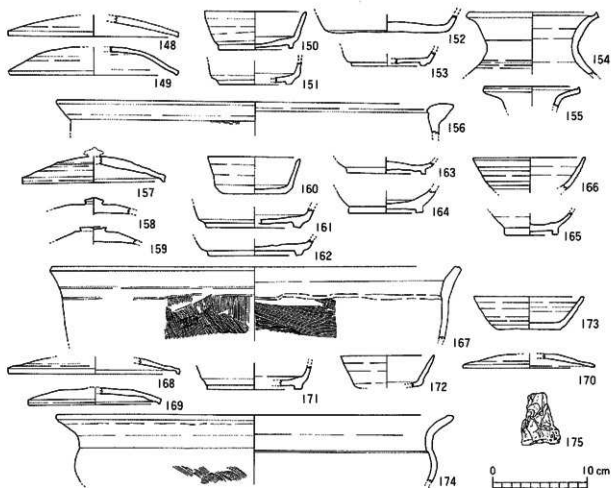
第7图 宫道遗迹出土遗物实测图(2)



第 8 図 宮道遺跡出土遺物実測図(3)



第9图 宫道遗址出土文物实测图(4)



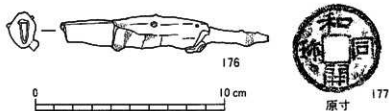
第10図 宮道東遺跡出土遺物実測図

(2) 宮道東遺跡の出土遺物

1号住居跡の出土遺物

宮道東遺跡の出土遺物は第10図に示した。第10図148から156は1号住居跡出土の遺物である。148～155までは須恵器であり、156は土師器である。148・149は坏蓋で、148は端部が尖り気味に引き出され、149はカマドから出土したもので端部が膨らみを持ち下方に引き出される。150～153は坏身でいずれもカマドから出土したものである。150・151は底部中央が下がり高台に近いもので、153は比較的高台が低い。152は無高台坏の底部片である。154は広口壺の口縁部で、155は長頸甗の口縁部である。156は土師器の鍋形土器の口縁部で口縁部が三角状に厚く外面にわずかにタテのハケ目がみられる。第11図176の刀子は1号住居出土のもので、先端が破損しているが、鞘に収まった状態である。177は1号住居床面から出土した和同開珎である。直

径2.4cm、重さ2.4gを測る。



第11図 宮道東遺跡1号住居跡出土刀子、和同開珎図

2号住居跡の出土遺物

第10図157から167は2号住居出土の遺物である。157～166は須恵器で167は土師器である。157～159は坏蓋で158は擬宝珠状ツマミで、159はツマミの上部が窪んでいる。160～166は坏身である。160は無高台のもので、161から163は有高台のもので底部は150・151のように下がらない。164・165は長頸埴の底部と思われる。166は坏身で口縁部が緩やかに立ち上がる。167は土師器の鍋形土器で口縁部は細長く胴部より厚い、外面にタテ・ナナメのハケ目が施され、内面にはヨコのハケ目がみられる。

3号住居跡の出土遺物

第10図168～173は3号住居出土の遺物である。168～172は須恵器で173・174は土師器である。168～170は坏蓋である。168・169は端部が下に引き出されるが、170は端部が丸みを帯びて終了する。171は有高台の坏身の底部で、底部はほぼ平らである。172は口縁部がナナメに直線状に立ち上がる。173は土師器の坏身で底部径に対して口縁部径が開く。175は鉄滓である。

第2トレンチ出土遺物

174は鍋形土器で口縁部が緩やかに外反する。外面にはナナメのハケ目がみられ、内面頸部には粘土の縞目がある。

6. ま と め

宮道遺跡では6基の住居跡が確認され、宮道東遺跡では3基の住居跡が確認できた。遺物の出土量が少なく確定できるわけではないが、一応、それぞれの住居跡の時期をみると宮道遺跡1号住居跡はおおよそ8世紀第4四半期、2号住居跡は9世紀頃、3号住居跡は9世紀前半、5号住居跡は8世紀中葉、6号住居跡は9世紀前半と想定できる。宮道東遺跡では1号住居跡が7世紀末から8世紀前半、2号住居跡が8世紀中葉から後半、3号住居跡が9世紀前半と推定できる。昭和46年に検出した住居跡は、2棟とも平安時代と考えられている。また平成11年7月の調査で検出した2棟の住居跡からも灰釉陶器が出土しており、平安時代のものと思われる。これらのことと出土土器から宮道遺跡は7世紀後半から11世紀以降まで続くものと思われる。

宮道遺跡・宮道東遺跡の住居跡の構造については部分的に床面に粘土が残っているものがあり、床に粘土を敷いて使用していたものと思われるが、その粘土が全くないか部分的にしか残っていないこと、三保半島では粘土が出土しないことなどから住居の廃絶時に床の粘土を剥がして再利用した可能性が考えられる。また住居内から柱穴が検出されていないことは、昭和48年の調査で述べられているように床に石を敷いてその上に柱を立てる工法をとっていた可能性も考えられる。

宮道遺跡・宮道東遺跡の出土遺物では遠江系の水平口縁の甕形土器の特徴として、内面頸部付近に粘土の縞目が残っていることがあげられる。

また、宮道東遺跡の1号住居跡から刀子や床面から和同開珎が出土したことは特筆すべきことと思われる。和同開珎は中央の方芽が大きいこと、輪郭が中細線であること、玳の次が王<尔であることなど新和同銭に類似している。平城京出土の木簡に「駿河国藤原郡川名郷三保里矢田部小嶋煮堅魚」とあり、堅魚を煮た鍋とされるものの出土や昭和46年出土の釣針もあり、これを裏付けるものであろう。和同開珎が出土したことは煮堅魚とともに中央との関係を考えるうえで貴重なものである。

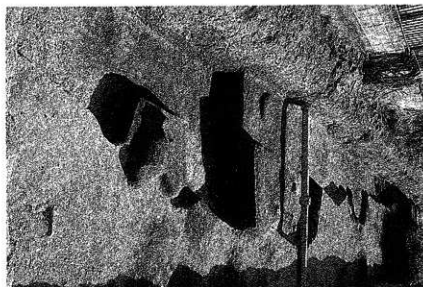
宮道遺跡・宮道東遺跡は第3図にあるように地理的にも出土遺物も類似しており、今後は同じ遺跡と考えても良いのではないだろうか。

図版第 1

1. 宮道遺跡調査前



2. 宮道遺跡調査区北から



3. 宮道東遺跡調査区西から

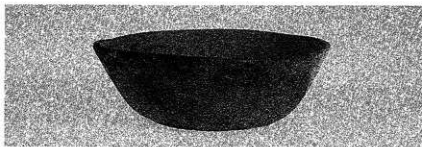


図版第2

1. 宮道東遺跡調査区南から



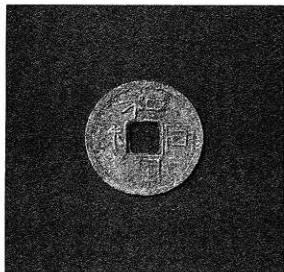
2. 宮道遺跡出土土器



3. 宮道遺跡出土土器



4. 和同開珎



報告書抄録

ふりがな	みやみちいせき・みやみちひがしいせきはつつつちようさほうこくしょ				
書名	宮道遺跡・宮道東遺跡発掘調査報告書				
編著者名	大川敬夫				
編集機関名	静岡市教育委員会				
所在地	〒424-8701 静岡市教育委員会				
発行年月日	2004年3月30日				
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
ミヤミチイセキ 宮道遺跡	シズマキシニシノミヤ 静岡市清水三保 アザミヤカ 字宮道1853	22201	市番号 清水 217 218 県番号 清水 192	宮道遺跡 35° 00.103'	宮道遺跡 138° 31.373'
ミヤミチヒガシイセキ 宮道東遺跡	シズマキシニシノミヤ 静岡市清水三保 アザミヤカ 字宮道1864-1			宮道東遺跡 35° 00.091'	宮道東遺跡 138° 31.419'
調査期間	調査面積	調査原因	所収遺跡	種別	主な時代
19991012 19991027 20010312 20010427	宮道遺跡 120.8m ² 宮道東遺跡 175.09m ²	アパート建設 宅地造成	宮道遺跡 宮道東遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代
主な遺構		主な遺物		特記事項	
住居跡		土師器、須恵器、 灰釉陶器、刀子		和同開珎	

宮道遺跡・宮道東遺跡発掘調査報告書

発 行 日 平成 16 年(2004年) 3 月 30 日

編集・発行 静岡県教育委員会
〒424-8701
静岡市清水旭町 6 番 8 号
TEL 0543-54-2526

印 刷 黒船印刷株式会社

